OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>黒川雅之著『八つの日本の美意識』を読む
Author(s)	榊原, 吉郎
Citation	デザイン理論. 2007, 50, p. 192-193
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52822
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

黒川雅之著
『八つの日本の美意識』を読む

講談社刊（18.8×12）挿図48　2006・7・21　189ページ

榊原吉郎

本書は，新書版に近い版形であり，頁数も多くない。また自筆の挿図があり気軽に読破できる分量である。しかし内容は深く，示唆するところが多いことが見逃せない。今日では，社会の情報量が50年前と比較して途轍もなく多くなり，様々な知識のみが一人歩きし，それに振り回され，単なる知識に止まり知恵に変換結晶しない現象を生み出している。このような現象は，本書の冒頭で黒川の「日本は西洋の世界観の奴隷であった」と指摘するところに原因が存在するのではないか，と考える。

彼はその理由を「近代以後の日本の状況を考えると，どうしても日本は西洋的世界観の奴隷だったのではないかという思いがあります」といい，さらに「西洋の近代思想はキリスト教思想を背景にしています。なかでもバウハウスから始まった近代のデザイン思想は，ドイツを中心とするゲルマン民族の思想を色濃く反映しています。にもかかわらず，日本がこれほどのスピードで西洋の思想に塗り替えられていったのは，日本のものや空間と微妙に共通した部分を切り口にして，日本の美意識が近代思想にすり替えられてきたように思えてならないのです」という。

そこで彼は日本の美意識を8個のキーワード，「微」「並」「気」「間」「秘」「素」「仮」「破」を用いて日本の美意識を分析してみせる。もちろん，日本の美意識をこの8個のワードで分析できるとは彼もかんがこの分析の視点設定の面白さにまず筆者は共鳴した。さらに分析手法に著者のプロダクト・デザイナーのとしての経験が滲み出ているのに共感を覚えた。

8個のキーワードはそれぞれ有機的に関連し合い，孤立していない。従って全てのキーワードを紹介するべきなのだが，ここでは敢えて無謀な試みとして「気」のみを採り上げ読み解いてみる。

まず，黒川は「気配」，「妖気」，「気が合う」，「気が散る」，「気が大きい」「気が小さい」など「気」を用いた日本人が普通に用いる言語表現を80余り拾い出し，「気」の姿を捉える。「図12　気配」において『人や物の周りには気配があり，それを「気」といいます。この「気」を持つ人や物が集合すると，そこに「間」が生まれます。「間」の正体とは，人や物が音が(ママ)発する「気」だったのです』と解説する。

人や物が発する音が『気』になると捉えるのが自然であり，彼自身も後に「虫の音」に美を感じる日本人の能力を認めているので，ここでは誤植として置きたいが，「人や物が音が発する『気』だった」という表現が気になる。

「気」の概念については，『いきの構造』を持ち出すまでもなく，様々な視点から考察されてきた歴史遺産がある。「間」の正体を「音」を媒体にして解くことは，「音」とは何であるかを解明せずに「間」の正体を規定することが出来ない。ただ「音」には時間が関わり，波として伝わるところから空間が必要となることは明らかであろう。

人や物が自然に発するものが「気」であると考えられてきたのであり，「音」自身にも「気」が存在すると信じられてきた。虫の音

にも畏敬の念をもったのである。

本来漢字は中国で創りだされたものである。漢字がわが国に伝来してから「気」という文字の遣い方が独自に展開した。その中で醸成され，意識を籠めた文字表現へと変化しているのである。その根拠が八十余りの表現の存在となっており，それらの表現が物語っている内容を辿ることにより，日本語を創りだした日本人が意識する「気」の範疇が明らかになる。

黒川の手法は，この意識を基に日本の美意識を読み取り，「西洋の世界観」とは異なる世界が厳然として存在することを示すことにあった。つまり表現の知恵に結晶させてきたわが国の美意識の実体を解き明かすことにあった。

この実体をもとに，日本建築の原点にある柱をとりあげ，日本家屋は気配の建築とする。「日本の家屋は，複数の柱や梁が寄り集まって，その気配が重なり合ってできているのではないかと考えています」という。洞窟と比較し，「柱は象徴的」であり「洞窟の物理的な庇護に対して，柱はシンボルのように心の支えになるのです」と記す。さらに「洞窟と柱の形を見ていると，女性のヴァギナと男性のペニスに似ていることに気づくでしょう」という。

建築の原点に女性型と男性型があると考えている。このあたりはフロイトの精神分析学を想起してしまうが，二元論的に捉える発想は洋の東西を問わないところがあり，建築の分類に取り込むしなやかな黒川の感性が感じられる。

柱を中心に展開してきたのが日本建築の歴史だとすると，そこから発生するのが垣根越しに対話する「向こう三軒両隣」の意識である。20世後半からの僅か半世紀に過ぎないが，今日の我々の居住空間は壁を基にした建築に取って代わられている。とすれば，洞窟へ引籠もる居住空間を選択したことになる。黒川のいう「西洋の建築は実体的で，日本の建築は象徴的」とする西洋建築に居住することに他ならない。確かに，今日のわが国の住宅建築は洞窟と云って良い様相を示している。集合住宅を例に挙げれば，出入りの口が一箇所であり，壁に囲まれた空間に居住する形式になっており，柱を中心にした数奇屋造りとは異なる。このような居住空間から生まれ出る日本人の意識が，「向こう三軒両隣」という居住空間によって育てられた意識と断絶するのは当然の帰結といえよう。

従って日本人の美意識も変化せざるを得ないであろう。『美しい国』を求める戦後生まれの日本のリーダーが意識する根底に洞窟空間から生み出された「美」であるとするならば，黒川が指摘する日本人の深部にあるアイデンティティとは大きく異なる，といわざるを得ないのである。日常の空間に束縛され，そこから創りだされる意識の恐ろしさを本書から読み取ることが出来る。